慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会の経済的発達に関するミルの見解に就て
Sub Title	
Author	榎本, 鉱治
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.8 (1925. 8) ,p.1185(95)- 1211(121)
JaLC DOI	10.14991/001.19250801-0095
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19250801-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社會の經濟的發達に關するミルの見解に就て

榎本鑛治

一

ジョン・スチュアート・ミルは、其の著「經濟學原理」の序論中に社會の經濟的發達を簡明に記述して居る。而して彼の記述の主要なる目的は、(一)富の數量及び種類と、(二)社會成員間に於ける富の分配樣式とに就て諸國民並に諸時代に顯著なる差異の存することを說明するにある。以下私は、彼の見解の大要を紹介する。

即ちミルの見解に從へば、社會の經濟的發達の第一歩は、狩獵若くは漁撈の時代、別言すれば野蠻狀態(the hunting or fishing state, or the savage state)である。現今の人間社會は、一般に植物の自然的產物に依て專ら其の生活を維持するものではない。併し乍ら多くの蠻人は、今も尙ほ狩獵漁撈の獲物に依てのみ其の生活を維持するのである。即ち蠻人の衣服は獸皮である。又彼等の住家——と云ふよりは寧ろ小屋——は丸太とか樹皮とかを以て手輕に組立てられ、而も一時間位にて其の儘に拋棄せらるゝことさへある。更に彼等は、殆んど食物を貯藏しやうと心懸けないので、食物を集積することなく、又往々之を拋置して後に多大の缺乏を感ずることがある。

去れば斯る社會に於ける富は、主として彼等の纏へる獸皮より成るのである。其の他富と看做さるゝものには、多數蠻人の趣味の中心となる僅少の裝飾品あり、或る粗末なる什器あり、彼等が生存手段として獲物を殺し、又は敵意ある相手と戰ふための武器あり、河湖を横斷し、又は海中に出漁するための丸木舟あり、或は文明國民の毛布、火酒、煙草等と交換するために蒐集したる或る種の毛皮乃至荒野の產物がある。尙ほ外國の產物も、亦之を貯藏して消費せざる部分に屬するであらう。更に斯の如き貧弱なる物質的富（material wealth）の目錄中に加へらるゝものに、土地がある。勿論蠻人に取ての土地は、生產の要具に相違なきも、遙かに統治せられたる社會に比すれば土地の利用せらるゝことが甚だ少ないのである。而も尙ほ土地は、彼等蠻人の衣食の源泉にして、又現在の所有地より廣汎なる土地を必要とする農業的社會（agricultural community）が近隣に存在すれば、其の土地も亦市場價値（marketable value）を有するのである。是れが、人間の存在せる或る社會中最も貧困なる狀態である。然るに他には、遙かに富裕なる社會が尠なからず存在するけれども、其の多數の住民の衣食と慰安とに關する狀態は蠻人の狀態に、比して毫も羨望す可きものではないのである。

二

前述の野蠻狀態に一歩を進めたるものは、遙かに有用なる動物を飼育する時代である。茲に於て所謂牧畜時代若くは遊牧時代（pastoral or nomad state）が發生するのである。此の時代に於ける人類は狩獵の獲物に依て衣食するものではない。換言すれば彼等は、動物の乳汁及び乳汁よりの製品に依て、又は牛馬羊等の頭數を年々增加して其の生活を維持するものである。此の狀態は、夫自體に於て甚だ望ましきものたるのみならず、又進歩を促すために一層役立つものである。而して此の時代に至れば遙かに多量の富が集積せらるゝのである。即ち地上の廣大なる天然の牧場が、充分に占有せられて其の再生產の及ばざる程迅速に消費せられざる限り、絕えず增加し行く莫大なる生活資料は、野獸の襲來と食肉人種の腕力若くは好計とに對して家畜を保護する勞働と粗ほ等しき勞働を以て、蒐集せられ又保存せられ得るのである。故に活動的節儉家は、何れも彼等自身の努力に依て早晩牛馬羊等の大群を所有するに至るのである。而して家族及び種族の上長等も、亦其の順從者共の努力に依て同樣の結果を得るのである、茲に於て遊牧時代には、所有物件の不平等なる事實が、生ずるのである。而も其の事實は、野蠻時代に於ては殆んと存在せざるものである。

元來野蠻未開の時代に在りては何人と雖も、絕對的必要品（absolute necessaries）以外に何物をも所有することなきが故に、一度其の缺乏を來したる場合には、夫等の絕對的必要品をさへ自己の所屬種族全員に分與しなければならぬのである。然るに遊牧時代に於ては、或る者は多數の人口を支持するに足る程豐富に家畜を所有すると同時に、又他の者は幾分餘計の頭數、否思ふに全然一頭の家畜をさへ占有保持せんと工夫せざるの有樣である。併し勿論生活資料に事缺く患ひはない。何となれば裕福なる者は、其の餘剩物件を使用して貧窮なる者を扶持する以外に、何等なすことなきと共に、又彼等の關係せる人口の增加は、悉く安全と權力と（security and power）の增加を意味するが故である。斯の如くして富裕なる者は單に統治と監督と（government and superintendence）の勞働に

のみ從事し、而も戰爭の場合には奮鬪し、又平時の場合には奉仕す可き從者を取得する能力を與へらるゝに至るのである。

斯る時代の社會に於ける特長の一は、社會の一部又は或る程度に於て社會の全部が、閒暇を有すること、是れである。詳言すれば若干の時間は、翌日に對する憂慮に費されず、即ち筋肉の活動に必要なる休息に用ひらるゝのである。斯の如き生活は、新たなる慾望（new wants）の發達に取て頗る好都合にして、又夫等の新慾望滿足の可能性（a possibility of their gratification）を開くの端緒である。

然らば新たに發生する慾望とは、何ぞや。先づ第一に發生する慾望は、野蠻未開の時代に於て滿足せるものよりも一層優良なる衣服、什器、及び道具に對する欲求（desire）である。而して餘剩の食物は、種族の一部の努力を斯る目的に充當せしむるために之を用ふるのである。去れば總ての否、多くの遊牧時代に於て吾々の發見するものは、粗品の家內製造なれども、時に此の遊牧時代に於て精品の家內製造を見ることもある。而して幾多の證據の指示する所に依れば、近世文明の發生地たる夫等の遊牧地は、一面に於ては今も尙ほ概ね遊牧時代の域を脫却し得ないけれども、他面に於ては羊毛、衣服用の紡績、織布、染色や、皮革の調製や、又は一層困難なる發明と思はるゝもの、例へば金屬細工の發明の如きものに就ては、樣々の熟練の發揮せられたることを見るのである。且思辯的科學（speculative science）の曙光を見たるは、社會的進步の斯る時代に於ける特長たる所謂閒暇（Leisure）の事實に基づくのである。例へば初期の天文觀察の如きも、粗ぼ信憑し得可き傳說に依れば、カルディーア（Chaldea）の牧羊者等の行へる所であると云ふ。

III

扨て人類の慣習に於ける一大變化は至難にして、一般には之を苦痛とし、或は之を遂行するも頗る遲々たるの有樣なるが故に、社會に於て斯く牧畜時代が農業時代（agricultural state）へと推移することは、甚だ容易ならざる所であるけれども、而も其の變化は、所謂出來事の自然的行程（spontaneous course of events）に屬するのである。即ち人口と家畜との增加が、軈て自然の牧場を供給する地球の能力に壓迫を加ふるに至り、斯くして此の原因のために始めて土地の耕耘が促さるゝに至るは、些少の疑問も容れざる所である。而して其の狀態は、恰かも之に亞ぐ時代に於て同樣の原因のために未だ遊牧時代を脫せざる國民の大群が先づ既に農業時代に入れる國民の土地を奪取するに至り、其の結果幾何もなく農業時代に入れる國民が斯る侵入者を擊退するに足る勢力を維持するに至りて、侵入せる國民も亦逸出するに途なく、遂に農業的社會とならざるを得ざると相似て居る。

併し此の大階級が一度完成せられたる後、次で到來する人類の進步は、一樣々なる狀態の結合せる一二の實例を除けば一豫想せられ得る程に甚だ急速ならざるものゝ如くである。勿論土地が最も貧弱なる耕作方法に對して供給し得る食物の數量と雖も、純然たる牧畜時代に於て取得せられ得るものに優ること萬々なるが故に、其の結果は必ずや人口の一大增加である。而して此の附加的食物は、唯だ一大附加的勞働量に依てのみ取得せらるゝのである。去れば農夫は、單に遊牧的人民より遙かに僅少なる閒暇を有するのみならず、又長年使用し來れる—而も大部分の地方に於て今も尙ほ

廢止不用とならざる—不完全の道具と不熟練の過程（imperfect tools and unskilful processes）とを有するに過ぎざるが故に、一般農夫は、氣候と土壤との頗る有利なる狀態に在るに非ずんば、自己に必要なる消費以上に食物の餘剩を多量に生産して、他部門の産業に從事せる勞働者の凡ゆる大階級を扶持することは、到底なし難き所である。而も其の餘剩すら、其の多少を論ぜず、生産者の從屬せる政府か、將又優越的威力（superior force）を以て若くは從屬と云ふ宗教的或は傳統的感情（religious or traditional feelings of subordination）を利用して其の地の領主となれる個人か、二者其の一に依て生産者の手より常に沒收せらるゝのである。

斯く政府に依る沒收（appropriation）の最初の樣式こそ、史的記錄の存在以前より亞細亞平原に割據したる諸大王國の特長である。勿論夫等の國に於ける政府なるものも、國王自身の性質に從ひ其の本質にも數多寬酷の差異があつたけれども、而も其の耕耘者に單なる必要品を殘し置くに過ぎざることは、決して稀有ではなかつた。而して其の政府の沒收する所は、時として耕耘者の必要品にさへ及ぶことあるが故に、政府自體は、耕耘者の所有物件一切を沒收したる後に、再び被沒收者たる農民に對して其の沒收したる所の一部分を貸附けざる可らざる事實を知ることが甚だ多いのである。然らずんば、被沒收者は、一粒の種子をさへ得難く、更に次回の收穫時期迄其の生活を維持することが出來ないのである。即ち此の時代に於ける人民の大多數は、頗る貧弱に給與せらるゝに反して、政府は多數の人民より夫々少額の貢稅（contributions）を徵集して、其の管理に太過なければ其の社會の一般狀態に比して甚だ裕福なる外觀を呈示し得るのである。

茲に於て東洋諸國の巨富に就て宿弊的印象が生じたのである。而して歐洲諸國の人々が之に關する疑惑を闡明したるは、極めて最近の事實である。今徵稅に從事する人々の掌中に入る大部分を考慮に加へずとするも。此の國富に關係する者には、元首の直接家族以外に、勿論多數の國民がある。即ち此の富の大部分は、政府の諸職員間及び元首の恩寵者間に分配せらるゝのである。而して偶々公益事業に投資することあるも、是れは其の一部分に過ぎない。例へば熱帶地に於ける耕作用の水溜、鑿井、灌漑用の運河、或は河川の堤防、或は市場（bazars）或は宿泊所等—總て是等は、其の利用者の所持する僅少の資金を以てなし得るものではない。勢ひ之が建設經營は、上級諸侯の仁心に依るか、若くは富豪の慈善に賴らねばならぬ。而も斯る富豪の財産も、其の由來を探求すれば、常に直接或は間接に公的收入より抽出せらるゝものなるが故に、結局多くは元首が公的收入の一部分を直接に授與したる事に起因するものである。

斯る社會の統治者は、彼自身の維持、及び彼と利害を共にする人民一切の維持に多額の支出をなし、而して彼の安全即ち彼の國家に必要と考ふる丈け多數の兵士の扶持に支出したる後に於ても、尙ほ彼の手許には彼の自由に處分し得る金額が殘存するものである。而して統治者は、進んで此の殘餘の金額を以て、彼の嗜好に適應せる奢侈品（articles of luxury）の交換入手に努めるのである。又斯る殘額があればこそ、統治者の恩寵や、公的收入の取扱に依て裕福となれる人々の階級も存在するのである。斯くして狹小裕福の市場に適應せる精巧高價の製造品に對する需要が生ずるのである。此の需要に對しては、屢々遙かに進步したる社會の商人が專ら供給するものではあるけれども、

夫れは亦往々自國内に工匠なる階級（class of artificers）を發生せしむるに至るのである。而して此の工匠階級は、或る種の工業を極めて優秀なる程度に、詳言すれば其の性質に關して何等多大の知識を具有せざるも、辛抱や、敏速なる知覺及び觀察や、手工的巧妙等に依て製造し得る程度に迄も發達せしむるものである。例へば印度の綿布工業の如き是れである。

然らば是等の工匠は何に依て扶持せらるゝか。即ち政府並に官吏が收益の分前 their share of the produce）として取得する餘剰食物に依て、彼等工匠は扶持せらるゝのである。今斯る場合を最も文字通りに表示せる實例がある。即ち或る國に於ける工匠は、自宅にて仕事をして其の完成せる場合に若干の賃銀を支拂はるゝには非ずして、彼は道具を携帶して彼の消費者の家庭に赴き、其の仕事の完成する迄其の家に滯在するのである。

併し乍ら斯る時代の社會に於ては、總ての所有物件が不安危險の狀態にあるが故に、最も富裕なる顧客すら、不朽の性質を有し、且又容積の細小なるに比し莫大なる價値を具ふる（containing great value in small bulk）が如き、隠匿若くは運搬に適應せる物品を撰擇するに至るのである。故に黄金と寶玉とは、是等の國に於ける富の大部分を形成するものにして、例へば多くの富裕なる亞細亞人の如きは、殆んど彼の全財産をば彼の身體と妻妾の身體とに纏はしむる有樣である。去れば君主以外には、容易に移轉し難き樣式に於て彼の富を投じやうと考ふるものは、一人もないのである。然るに君主は、一度自己の王位の安全なるを知りて、當然之を自己の子孫に讓渡し得るを信ずれば、時に彼は、其の趣味を永續的建設物に慈にすることがある。斯くして建設せられたるものに、埃及のピラミッド（the Pyramids）あり、又セクンドラのタジュ・マール及びモーソリーアム（the Taj Mehal and the Mausoleum at Sekundra）がある。因に後者は何れも著名なる大建築物である。

次に耕耘者の慾望を滿足せしむる簡單なる製造工業は、各地の部落に於ける工匠に依て經營せらるゝものにして、彼等工匠は、其の報酬として或は無地代にて（rent-free）耕耘し得る土地を給與せられ、或は政府が村落の人々に對して取殘したる收穫作物中より實物賃銀を支給せらるゝ（fees paid to them in kind）のである。勿論此の時代の社會に於ても、所謂商人なる階級（mercantile class）が全然缺如せるものではない。即ち當時の商人階級は、穀商（grain dealers）及び金貨（money dealers）の二部より成るのである。而して穀商は、直ちに生産者より穀物を購入することなくして、政府吏員より專ら穀物を購入するのである。何となれば政府吏員は、政府の收入を實物にて收受すれども、其の收受したる穀物をば、君主、文武の大官、多數の軍隊、是等各種の人々の慾望を充足せしむる工匠等の群住せる場所へ運搬する仕事は、之を好んで他人に委任するが故である。又金貨は、不作若くは納稅に依て困窮せる場合に不幸なる農夫に對して生活維持及び耕耘繼續の資金を貸附け、而も次回の收穫に際して其の返濟を受くる場合には、莫大なる利子を徵收するのである。然らずんば金貸は、大規模の貸附を行ふものにして、其の相手は、政府か若くは政府が收入の一部分を授與する人々かである。而して金貸が其の報償として受くる所は、徵稅の一部分の委託讓渡か、若くは或る地方の納稅區域の所有移轉かである　斯くして兩者は、其の受領收入の中より借金を返濟するのである。

茲に於て如上の事實を許容するためには、同時に其の政府の諸權力の大部分は、彼等金貸の手に移

されて、其の抵當納稅區域が買戻さるゝか、若くは斯る區域の收入が債務を完濟する迄金貸の手に依て諸權力が行使せらるゝのを常とするのである。斯の如くして是等兩商人階級の商業的作用は專ら其の政府の收入を形成する國內收益の上に及ぼすものである。即ち商人階級の資本(capital)は、其の收入の中より定期的に利潤(profit)を附して返濟せられ、又其の收入は、概ね商人の本原的資金(their original funds)を齎らす源泉である。是れは、其の一般的特色より觀て、亞細亞諸國の經濟狀態である。然り、斯る經濟狀態は、眞の歷史の開始以前より存在せる所にして、又外國の勢力に蹂躙せられざるが故に、今日に於ても(一八四八年)不變の有樣である。

四

然るに古代歐羅巴の農業的社會に於ける趨勢は、前述の事實と大いに相違せるものである。其の起源より觀れば是等の農業的社會は、概ね狹小なる都市的共同團體(town-communities)にして、即ち前人未住の土地又は前人を放逐せる土地に於て斯る社會を初めて建設するに際しては、所屬の土地は、之を其の社會の構成家族間に規則正しく、或は平等に、或は等級を設けて、分配割賦したるものである。或る場合には一都市の代りに、數都市が一大同盟(a federation)を締結することもある。而して是等の都市の住民は、同一人種にして、又粗ぼ同一時期に其の地に移住したと推定せらるゝのである。總ての家族は、夫自身の食物と衣服原料とを生產するものにして、是等の衣服原料は、通常一家の婦人の手に依て、其の時代を滿足せしめたる簡單なる工業に使用せられしものである。

去れば當時には、租稅(taxes)が全然なかつた。何となれば當時の政府には、俸給を支拂ふ可き吏員なきか、若くは斯る吏員ありとするも彼等の俸給は、國家が奴隸をして耕耘せしむる保留土地の收穫の中より支出せられたからである。而して軍隊は、今日と異なりて市民全體より組織せられしものである。故に土地の全收益は、何等の削減を被むらずして、其の土地を耕耘せる家族の所有に歸したのである。世態の進步が斯る財產の分配を是認し、又繼續せしむる限り、此の社會狀態は自由耕耘者(free-cultivators)の大多數に取て、恐らく望ましきものであつたらう。

而して斯る社會に在りては、時に人智の進步の頗る急速且目覺ましき場合がある。殊に斯る現象の發生せる所は、對岸に開化せる人種を控へたる氣候佳良の海邊である。斯る社會の人々は外國の產物に接し、又其の觀念及び發明を知ること多きが故に、幾何もなく對岸の共同社會と關係を結ぶに至るものである。今其の產業的發展に就てのみ云へば、即ち彼等は、既に早く各種の慾望と欲求(variety of wants and desires)とを習得し、而も是等に刺戟せられて彼等の知れる限り其の土地の產出力を極度に迄利用するのである。而して若しも其の土地が不毛なる場合か、又は土地の能力の限界に到達せる場合かに於ては、彼等未開の人々は屢々貿易商人(traders)となりて、外國の產物を購入し、之に利潤を加へて外國に賣却するに至つたのである。

併し乍ら斯る事態の存續期間は、最初より不安危險である。蓋し是等の小共同團體は、殆んど絕間なき戰爭狀態の中に生活せるものである。勿論之に就ては幾多の原因があつた。かの純然たる未開の農業的社會に於て往々戰爭の原因となれるものは、其の限られたる土地に於て激增し行く人口の單なる壓迫に外ならぬ。而も其の壓迫は、通常彼等の粗放なる農業狀態に於ける不作のために一層

猛烈となるものであるけれども、尙ほ其の場合にも依然として彼等は、極めて狹隘なる國土內に食物を搜索しなければならない。玆に於て斯る際には其の共同團體は、屢々武裝して他國に侵入するか、若くは武裝せる靑年を他國に派遣するかして、自己よりも戰鬪力乏しき人々を搜索し、或は其の領土より彼等を驅逐し、或は彼等を引留めて自國の利益のために奴隷となして、其の領土を耕耘せしむるに至つたのである。而も是れは、眞に未開の蠻人の場合には其の必要に迫られて行ふに至りしものにして、又愈々繁盛の民族の場合には其の野心と尙武的精神とより企つるに及べるものである。

斯くして暫時經過すれば是等の都市的共同團體(city-communities)は、總て征服者たるか若くは被征服者たるかになり終るのである。或る場合には征服國家は、被征服國家に對して單に貢稅を以て滿足せることもある。何となれば一方に於て被征服者は、此の貢稅納付に依て彼等自身の海陸軍事的防禦の費用と煩勞とを免れ、而も斯る境遇の下に在て莫大なる經濟的繁榮の分前を享受し得ると共に、他方に於て勢力ある共同團體は、餘剩の富を取得して、或は驕奢のために或は土木のために利用し得るからである。洵に斯る餘剩の富があればこそ、或はパルセノン (the Parthenon 古代アテネ市の守護神殿) 及びプロピリア(the Propylea アテネ市のアクロポリスへ通ずる紀念街路)は宏大に建設せられ、或はフィディアス(Pheidias 古代アテネの彫刻家)の彫刻物は數多く購入せられ、或はエスキラス (Æschylus 古代希臘の悲劇的詩人)、ソフォクリーズ (Sophocles 古代希臘の悲劇的詩人)イッリピディーズ (Euripides 古代希臘の悲劇的詩人)、アリストファーニーズ(Aristophanes 古代希臘の喜劇作者) 等の著名なる劇詩の題材を構成したる祝祭は、花々しく擧行せられたのである、

併し斯る狀態の政治的關係は、人類の進步と其の終局的利益とに取て、其の繼續せる間は甚だ有用であつたけれども、全然永續性の要素を包藏しなかつたのである。凡そ小征服共同團體が其の征服せる人々を合併せざる場合には、終に他國に征服せられて、滅亡するのを常とする。故に結局廣汎なる領域は、此の奸策を實行せる人々——例へば羅馬人の手に歸したのである。即ち羅馬人は、他に樣々なる方策を採用したるも、兎に角彼等自身を裕福ならしむるために、土地の大部分を取得占有し、又其の地の豪族をば其の統治團體の中に擧用して、國家の消長を共にしたのである。併し羅馬帝國の陰慘たる經濟史は普ねく人の知る所にして、玆に細說する必要を見ない。抑も富の不平等なる事實が一度生じたる場合には、勤勉を以て財產の弊害を矯正するに努めなければならぬ。然かせざれば其の不平等なる事實は、愈々益々增長するものである。即ち富の大部分は、極めて少數の手中に歸するのである。去れば羅馬帝國の廣汎なる土地は、結局に於て比較的少數豪族の所有する所となり、斯くして一面には彼等の奢侈のために、更に又彼等の外見誇示のために、非常に高價なる生產物が好況を呈すると共に、他面には土地の耕耘者は、奴隷若くは殆んど奴隷狀態に近き小作人 (slaves, or small tenants in a nearly servile condition) に墮したのである。此の時代よりして羅馬帝國の富は、漸次減退したのである。遡て羅馬帝國建設の當初に於ては、其の公的收入並に富者の資源は、宏壯なる公私の建物を以て少なくとも伊太利全土を蓋ふに充分であつたが、遂に失政

續出の影響を受けて羅馬帝國は滅亡するに至り、殘存せる資源も夫等の建物に修繕を加ふることすらなし難き悲境に陷れるものである。即ち文明開化の羅馬帝國の威力及び富力も、今は北部國境に接近せる遊牧民の侵入を支へ難く、遂に羅馬帝國は彼等に征服せられて、玆に世態は一變したのである。

五

然らば世態一變後の社會は何ぞや。曰く、現代の產業的時代（industrial state）是れであると。現代の歐羅巴社會を構成せる新組織の下に於ては、何れの國の人口も、不平等なる割合に於て、別個の二國民若くは二人種、詳言すれば征服者及び被征服者（the conquerors and the conquered）より成立つと考へることが出來る。前者は土地の所有者にして、後者は土地の耕耘者である。勿論是等の耕耘者と雖も、或る種の條件を以て土地の占有を許容せられたのであるが、其の條件も、征服者の命令なるが故に、常に苛重のものたるを免れなかつた。併し耕耘者の境遇が絶對的なる奴隷狀態に墮することはなかつた。既に早く羅馬帝國の後期に於て、土地に從屬せる奴隷は、大々的に一種の農奴（a kind of serfdom）となり變つた。併し乍ら羅馬人の植民地（coloni）は、現實的奴隷と云はんよりは、寧ろ賤奴（velleins）と云ふ可きである。

然るに野蠻的征服者の能力が、個人的に管理する產業上の職業に對して適當せず、又彼等の趣味が之と合致せざりしがために、土地に於ける或る種の眞實なる利益は、之を努力の刺戟劑（an incentive to exertion）として耕耘者に許容せざるを得なかつた。例へば若し耕耘者が彼等の上長に對して一週三日間の勞働を提供しなければならぬとすれば、殘りの四日間の收益は、耕耘者自身に歸屬したるが如き類である。又當時の耕耘者は、通常域內の消費に必要なる各種の食料を供給せざる可らざる上に、往々過分の徵發を被つたのであるけれども、是等の需要に供給したる後に耕耘者が收穫し得たる附加的收益は、悉く彼等の自由に處分し得たるものである。中世紀を通じて此の制度の下に於ては、近世露西亞に於けるが如く、農奴が財產を獲得することは、不可能ではなかつた。現に露西亞に於ては、一八六一年三月三日農奴解放勅令（the Edict of Emancipation）の發布せらるゝ迄同樣の制度が尙ほ嚴然と存在して居たのである。斯く耕耘者の集積したる富こそ、眞に近世歐羅巴に於ける富の本原的源泉（primitive source）である。

斯る無秩序掠奪の時代に於て農奴は、其の集積したる極く小量の食物を以て彼自身の自由（his freedom）を買戾すか、若くは脫走して領主の束縛を離脫するかして、羅馬帝國の時代より破壞せられずに殘れる市城へ竄居したのである。蓋し斯る避難地は、彼等の階級の人々に依て圍繞せらるゝが故に、彼等は先づ此の地に住して、武士階級の亂暴狼籍又は苛稅强取（outrages and exactions）を免れ、以て安全に生活せんと欲したのである。是等解放せられたる農奴は、大多數工匠（artificers）となり、而して彼等は、封建的地主が所有地より取得せる餘剩食物及び餘剩原料と、自己の製造品とを交換して、其の生活を維持したのである。玆に於て亞細亞諸國の經濟狀態に相對せる一種の歐羅巴的經濟狀態なるものが生じたのである。但し之には一の除外例がある。即ち亞細亞に於ける一人の國王と寵臣及び雇人の浮動的團體との代りに、歐羅巴には甚だ確固たる多數の大地主階級

（fixed class of great landholders）の存在せること、是れである。併し此の大地主階級は、奢侈虛飾等に耽ることが出來なかつた。何となれば大地主は、之を個人的に云へば、其の處分し得る餘剩の收益は極めて少なく、即ち當時の社會に於ける好戰的慣習と、政府の保護の甚だ薄弱なりしこと、のために、大地主は長き間其の餘剩收益の大部を費消して、彼等自身の安全保護に缺く可らざる家臣從者の一團を扶持したるが故である。

斯る狀態の社會は、經濟的に適應せる亞細亞諸國に比すれば、甚だ堅固にして、個人的地位も亦安全なるが故に、自ら改善進歩に甚だ好都合なる主要の一理由となつた。從て此の時代よりして社會の經濟的進歩は、最早少しも中斷せられなかつたのである。又生命及び財產の安全確保と云ふ事實は、徐々ながらも著實に發達した。更に生活の技術は、不斷の進歩を遂げ、掠奪は最早集積の主要なる源泉（principal source of accumulation）でなく、斯くして封建的歐維巴は、商業的工業的歐羅巴たる域に到達した。中世紀の後半に至ては、伊太利並にフランダースの都市、獨乙の自由市（free cities）、佛蘭西並に英吉利の少數都市は、奮鬪的工匠の大人口と多數の富裕なる市民とを包含した。而して彼等の富は、製造工業若くは斯る工業の產物に依て獲得せられしものである。所謂英吉利の庶民（Commons）、佛蘭西の第三階級（Tiers-Etat）、一般大陸諸國の市民階級（bourgeoisie）なるものは、此の階級の子孫である。而して是等の階級は、節約階級（saving class）にして、封建的貴族の子孫は、浪費階級（squandering class）なりしが故に、前者は次第〳〵に土地の大部分を所有して、遂に後者に代るに至つた。此の自然的傾向は、或る場合には現在の土地所有者の家族に土地を保有せしむる目的を以て立案せられたる種々の法律に妨止されしも、他の場合には政治的革命のために促進せられしこともある。而して遙かに文明の進歩せる諸國に於ては、極めて緩漫ながらも次第〳〵に土地の直接耕耘者は、奴隷的若くは半奴隷的狀態を脫却するに至つた。併し乍ら合法上の地位並に彼等の到達せる經濟狀態は、歐維巴の他の諸國及び歐羅巴人の後裔に依て大西洋の彼岸に打建てられたる幾多の大共同團體に於ては、著しき相違の存するを見るのである。

六

現今の世界は幾多の廣汎なる地方を包含し、而も夫等の地方には前人の觀念にすら上らざりし各種の富が甚だ豐富に存在するのである。去れば無限量の食物が毫も强制的勞働を用ひずして年々歲々土地より採取せられ、依て以て現實的生產者を維持するのみならず、又各種の便宜品及び奢侈品の生產若くは之が運搬に從事する勞働者を現實的生產者と同人數丈け、否時には遙かに多く維持するのである。而も他面には多數の人が、是等各種の勞働を指揮管理するに從事するのである。加ふるに古代の最大奢侈的社會に於けるよりも多數なる一階級が存在して、而も彼等は或は直接に生產的ならざる職業に從事し、或は全然職業を有せざるものである　斯く收穫せられたる食物は、少なくとも同一の地方に於ては、從前よりも遙かに多數なる人口を確實に支持して、而も早期の歐羅巴史上に屢々見受くる週期的飢饉の襲來より彼等を免れしめたものである。然るに此の週期的飢饉の襲來は、東洋諸國に於ては現今すら稀有の事實と謂へないのである。斯の如く食物の數量は、大いに增加せると共に、食物の實質及び種類も、亦頗る改善せられたのである。

他方に於て食物以外の便宜品と奢侈品との利用は、最早少數の富裕階級（opulent class）に限定せられずして、社會に於ける各種階級の間に甚だ豐富に行き亘るに至つた。且又是等の共同團體が、何等か豫期せざる目的に適應せしめんがために採用する集合的資源（collective resources）、換言すれば或は海陸軍を維持し、或は有用なると裝飾なるとを問はず公共事業を經營し、或は西印度奴隷の贖金（ranson）の如き國家的博愛行爲を實行し、或は植民地を建設し、或は其の住民を敎育し、或は結局に於て經營を要することを遂行し、而も之が遂行に際しても其の住民の必要品若くは實質的慰安をさへ犧牲に供せざる所の能力（its ability）に思ひ到れば、斯の如きは實に過去の世界の未だ嘗て知らざりし所である。

併し乍ら近代の產業的共同團體の特長は、前述せる如く總ての點に於て、夫等の共同團體が相互に甚だしき差異を示せること、是れである。即ち過去の時代に比すれば夫等の共同團體は、何れも巨富を保有するけれども、其の保有の程度にも著しき差異がある。現に最大なる富裕國と稱せらるゝ二三の國に於てさへ、或る國は其の生產的資源を他國よりも一層完全に利用し、且其の領域の範圍に比して其の獲得する收益は他國よりも甚だ多量なることもある。又夫等の諸國は、啻に富の數量に於て相違せるのみならず、又國富增殖の速度に於ても相違せるものである。更に富の分配に於ける相違の事實は、富の生產に於けるよりも遙かに顯著である。即ち各國最貧階級の上位に在る諸階級間に於ける比例的人口と富裕との關係も、亦甚だしき相違がある。

次に土地の收益を本來配分せらるゝ階級の本質其物及び意義にも、各地に於て少なからず相違せるものである。即ち或る地に於ては、地主が一階級に合體して、產業に從事する諸階級も殆んど全く分離せる處もあれば、他の地に於ては、土地の所有者が粗ぼ一般に犂鋤を所有して、屢々彼等自身が之を使用する土地耕耘者たる處もある。而して地主自身が其の所有地を耕耘せざる場合には、往々地主と勞働者との間に仲介者（an intermediate agency）が存在する。此の仲介者は勞働者の生活資料を前渡し、生產要具（instruments of production）を供給し、又地主に一定の地代（a rent）を支拂ひて其の殘餘の收益を悉く自己の掌中に取得するのである。或は他の場合には、地主、借地人、及び勞働者が單に收益分受者たるに過ぎざることもある。更に製造工業は、往々此處彼處の個人に依て經營せらるゝものであるが、斯る個人は必要なる道具若くは機械をば或は所有し或は賃借し、而も所要の勞働は彼等自身の家族の勞働以外に殆んど之を雇傭せざるものである。又他の場合には製造工業が同一の建物內に多人數を集めて作業することもあるけれど、之に必要なる複雜高價の機械は、富裕なる製造工業家の所有に屬するのである。同一の相違は、商業取引の點にも亦存する。抑も卸賣商（wholesale operations）は、大資本を用ふるに非ずんば行はれ難きが故に、斯る大資本の存在する場所に於て營まるゝのを常とする。然るに小賣商（retail dealings）の保有する資本は、巨額に達するには相違ないけれども、是れは集合的の意味に於て巨額の資本と謂ふに過ぎない。故に小賣商は、往々小店に於て營まれ、而して專ら自己の家族、及び時には一人か二人かの丁稚と共に、商人自身の個人的努力に依て行はるゝのを常とす。尙ほ小賣商が時に大店舗を構へることもあるが、其の資金は裕福なる個人若くは組合の供給する所に係り、且其の取扱機關は幾多の有給男女店員よ

り成るのである。

扨て經濟現象に於ける是等の相違は、通常所謂文明世界の各地に存在する事實であるけれども、吾々が既に詳論したる早期の時代は、悉く現代に於ても尙ほ世界の何處かに存續せるものである。即ち狩獵的共同團體は、今も尙ほ亞米利加に存在し、遊牧的共同團體は、亞羅比亞と北部亞細亞の平原とに存在する。又今日の東洋社會は、其の本質上より云へば、過去に於ける東洋社會と何等の相違する所を見ない、現今の露西亞大帝國は、幾多の點に於て封建的歐羅巴の典型にして、殆んど變改の加へられたる所がないのである。兎に角人間社會の諸大典型は、エスキモー人若くはパタゴニヤ人の社會に至る迄總て現存するのである。(J. S. Mill, Principles of Political Economy, edited by W. J. Ashley, Preliminary Remarks, pp. 9-20.)

七

上來縷述したるジョン・スチュアート・ミルの社會の經濟的發達論は、彼の時代に於ては大いに卓越せるものであつた。而して彼の叙述の結構は大體に於て獨逸のフリードリッヒ・リストの夫れを踏襲せるものゝ如く、即ち狩獵若くは漁撈の時代(或は野蠻狀態)、牧畜若くは遊牧の時代、農業の時代、及び産業の時代なる四階段に分たれてある。(F. List, The National System of Political Economy, trans. by S.S. Lloyd, 1916, p. 93.)併し乍ら其の後幾何もなく、殊に獨逸の學者に依て所謂經濟史の立場より之に就て權威ある幾多の研究が發表られて居る　其の優なるものに、シュモーラーの經濟學原理あり(Gustav Schmoller, Grundriss der Allgemein, en Volkswirtschaftslehre, 1923, teil I. buch 1873)又ビューヒャーの「國民經濟の成立」がある。(Karl Bücher, Die Entstehung der Volkswirtschaft, 1873)尤も後者の見解に對しては多少訂正を要す可き點はある。其の他英國にはカンニンガムの西歐文明史(W. Cunningham, The Western Civilization in its Economic Aspects, 1898-1900)がある　更に現今に至ては大方の經濟原論は之を取扱ひて、其の記述も亦ミルの夫れに優る所が多いのである。

翻て其の所説の當否は暫らく措きて、ミルが斯くの如く史的叙述を試みたるにも拘はらず、殊に獨逸の歷史派經濟學者に依て非難せらるゝのは、何故であらうか。無論社會哲學に於けるミルの研究方法は、必らずしも妥當なるものではない。併し乍ら嘗て獨乙歷史派經濟學の泰斗ウヰルヘルム・ロッシャー博士のミルを指して「彼の頭腦は史的に非ず」(W. Roscher, Geschichte der National-Oekonomik in Deutschland, 1874, SS. 1012.)と批評したる言は、直ちに肯定してはなるまい。何となれば若しロッシャー博士の批評がミルに歷史的研究方法の資質なしと云ふ意味に於て放たれたものであるとすれば、ミルの執筆したる他の諸論文――例へば「ミシュレーの佛蘭西史」及び「ギゾー歷史論」の如き(Both are contained in Mill's Dissertations and Discussions, vol. II.)――が其の然らざる所以を示して居るからである。併しミルの經濟學には歷史的研究方法の應用せられたる所が甚だ少ないと云ふことは、之を認めなければならぬ。(Cliffe Leslie, Essays in Political and Moral Philosophy, 1879, p. 244)今其の適例を求めても、僅かに既出の部分と第二編第六、七、八の三章位に留まる。玆に於て私は、ミルが歷史的研究方法を餘りに適用せざりし理由を尋ねなければならぬ。

今ミルの少壯時代に於ける主要人物を數ふれば、當時第一流の社會哲學者はジェレミイ・ベンサムであり、權威ある經濟學者はデヴィッド・リカードオであり、優秀なる政治思想家兼心理學者は父ジェイムス・ミルであり、又代表的法律學者はジョン・オースチンであつた。殊にスチュアート・ミルは、リカードオの抽象學說と經濟現象を支配する現實力とを鞏固なる科學的體系に組立てんと努力したが、見事に失敗した。而して彼は、人類社會の全史を研究せずして、人類の觀念の起源と其の發達とに關する適切なる理論を與へんと欲したけれども、同じく成功しなかつた。無論其の點には無理があつた。併し乍らスチュアート・ミルが其の體系の確立に失敗したからと云つて、彼を難ずるのは當を得て居ない。夫れは、父ジェイムス・ミルの受く可き所である。何となればジェイムス・ミルが其の子ジョン・ミルに施したる訓練は、總ての獨創を粉碎するものであり、又父の採用せる方法に對して子は過度の信賴を措かせられたからである。更に注意す可きことは、前記のベンサム、リカードオ、オースチン、ジェイムス・ミル等が何れもスチュアート・ミルの所謂歷史の哲學（philosophy of history）を無視して居る點である。其の詳細は、例へば Leslie Stephen, The English Utilitarians, 1900, vol. I. pp. 296, 297, 304; vol. II, pp. 86, 216; vol. III, pp. 156-157, 237-243, 320. を參照せられたい。然るにスチュアート・ミルは、幾多の點に於て是等の功利主義者の影響を受けたけれども、歷史を無視する點丈けは免るゝを得た。

然らば何故にスチュアート・ミルは歷史を無視することを免れ得たのであるか、換言すればミルに最初に物的觀を發らしたものは何人であるか。其の人はサン・シモン派の人々及びオーギュスト・コムトである。彼は自叙傳の中に左の如く云ふて居る。

「他の何人にも優つて政治上の新しい考方を私に徹底させたものは、佛蘭西に於けるサン・シモン派の人々であつた。……私は彼等が初めて私に示して與れた人間進步の自然的順序に關する組織的見解と、特に彼等が總ての歷史を組織時代と批評時代と（organic periods and critical periods）に分割した遣方に、いたく感服した。……彼等の出版物中には又頭拔けて優秀と思はるゝものが一つあつた。その中に於ては、此の一般觀念が圓熟して尙ほ一層明確なそして敎訓に富むものと成つてゐた。是れはオーギュスト・コムトの初期の作で、當時自らサン・シモンの弟子と呼び、著書の扉紙にも然か名乘つて居たのであつた。此の論文の中に於て、コムト氏は後に氏が豐富なる引例を以て例證した所の學說、即ち人智の總ての部門に於ける三個の階段の自然的繼起の學說を初めて發表した。所謂三個の階段とは、第一に神學時代、次に形而上學時代、最後に實證時代である。……私が此の時サン・シモン派及びコムトの示唆した思想の行き方から享けた重なる恩惠は、次の點にあつた。即ち私は、思想の過渡時代の特徵に就て、以前よりも遙に明瞭な概念を得、斯くの如き時代の道德的及び智的性質を人性の正常な屬性と誤認する事を止めた。私は議論ばかり喧ましく、確信の薄弱な現代を通り越して、批評時代の粹と組織時代の粹とを集大成して未來を翹望した。即ち思想の無拘束的自由と凡て他人を害せざる個人行動の無制限的自由を備ふると同時に、何が正何が邪、何が有益何が有害なるかに就ての確信が、幼時の敎育と萬人一致の情操とに依つて深く感銘せられ、理性と人生の實經驗とによつて堅く基礎づけられ、宗敎倫理及び政治上の過去現在のすべての學說の如く

之を週期的に廢棄して他の學說に移る必要のなくなる時代を翹望した」。（今泉、石田共譯ミル自叙傳二三三——二三七頁、J. S. Mill, Autobiography, 1873, pp. 163-166.）

次にミルの動的觀に至大の影響を與へたものは、所謂ゲルマノ・コールリッヂ派の歷史哲學である。之に就てミルは自叙傳中に左の如く云ふて居る。

「……歐洲思潮即ち大陸思潮の感化が特に第十八世紀に對する第十九世紀の反動思想の感化が今や漸々として私の心に注ぎ込みつゝあつた。それは色々の方面からやつて來た。一つはコールリッヂの書いたものからで、コールリッヂの著作は私の意見に變動を見ない前から大いに興味を以て讀み初めてゐた。他の一つは親しく交際してゐたコールリッヂ黨からである。……此等の源泉からと、尙ほ又私が當時の佛蘭西文學と絶えず接觸を保つてゐた處から、私は歐洲思想家の意見の一般的顚倒に依つて今や優勢と成つた思想中特に次の數條を學んだ。人間の心意は或種の順序に依つてのみ進歩が可能であつて、或る事柄は是非共或る他の事柄に先立たねばならぬ事。……政治制度の問題はすべて相對的にして絶對的ならず、人間進歩の各階級は各特殊の制度を有せざるを得ざるのみならず、又有す可きものである事。……政治上の一般理論乃至哲學は何れもその基本として人類の進歩の理論を豫想し、人類進歩の理論は即ち歷史哲學と同一物である事、此等の意見は大體に於て眞であるが、私が當時最も屢々意見を交換するを常とした思想家は、之を誇張的に且つ猛烈に主張して居つた。そして此等の人々は、反動に通例である如く、第十八世紀の思想家達が見た所の眞理の半面を無視して居つた。併し私は、私の進歩の或る時期に於てこそ暫らくの間あの偉大な十八世紀を輕視してゐたけれども、さりとて私は之に對する反動には、決して加擔せず、眞理の他の一面をも採用したと同時に、十八世紀が寄與した一面をも緊りと把持してゐた。十九世紀と十八世紀との戰は常に私に一面は白く一面は黑き楯に就ての戰を想起させた。私は兩軍の鬪士が盲目的の怒を以て相突擊しつゝあつたのを不思議に思つた。私は彼等及びコールリッヂ其の人に對して、コールリッヂが半面の眞理に就て云つた多くの格言を適用した」。（邦譯自叙傳二三〇——二三二頁、J. S. Mill, Autobiography, pp. 161-163.）

ベンサム、父ミルの靜的觀に育てられたるミルに取て、人間及び社會が不斷の進化の途上に在るものとの見解は、驚異に値するものに相違なかつたらう。此の以後彼が如何に歷史に對する興味を覺えたかは、彼の「論集」四卷中に收めらるゝ幾多の論文に之を見ることが出來る。無論ミルの歷史に對する驚異は、今日より之を觀れば、幼稚の域を脫しないが、兎に角彼は十八世紀の思想家より進んで十九世紀の思想家となることが出來た。併し彼は、ダーウィンの進化論に就て何等の知識を持たなかつたと云はれて居る（John Mac Cunn; Six Radical Thinkers, 1900, p. 53; Leslie Stephen; The English Utilitarians, vol. III. p. 442.）蓋しミルの如く個人あるを知つて、人種なる團體を認めざる人に取て、ダーウィンの進化論を容るゝの餘地なきは當然である。即ちミルは、十八世紀の靜的觀を脫却せんと試みたるも、終に動的觀に昧達し得ざる矛盾を有したのである。此の點に就ては既に河合榮次郎氏が「經濟學論集」第一卷第三號に「過渡的思想家としてのジョン・スチュアート・ミル」なる題目を以て極めて詳細なる研究を發表せられて居る。依て私は其の概要を

記述するに留めた。參照ありたし。

以上簡單ながら私は、ジョン・スチュアート・ミルが歴史哲學に對する興味を有するに至りし證據を擧示した積りである。即ち彼が、ベンサム、父ミル、オースチン、リカードオ等と異なり歴史を無視しなかつた點を明かにした。然らばミルの經濟學研究方法は、歴史的方法を併用するものなりやとの疑問が生ずるであらう。即ち彼の「經濟學上未定の諸問題」中に於ける主張を要約すれば、經濟學の研究方法は抽象的推理法と觀察とを併用す可しと云ふにある。(J. S. Mill, Essays on some unsettled Questions of Political Economy, 1844, pp. 141-164.) 尚ほミルの經濟學研究方法に關する意見は、一八四三年に出版せる「論理學體系」に詳論してある。而して彼の觀念の要點は、次の一句に依りて察せられやう。曰く「自然科學の研究方法は社會科學の模範たる可し」[1]。(Autobiography, p. 165.) 而して「論理學體系」中に於ける經濟學研究方法の要旨は、先天的推理方法と、特殊の證明及び數學的物理學に於て功を奏せる直接的演繹方法とを結合するにある。(System of Logic, bk. vi, ch. ix.) 併しエッヂウォースは、之に就て「ミルがサン・シモン派の人々の影響を受けて功利主義の普遍性に疑を抱くに至りし時代に於ても尚ほ右の如き觀念を有せしや否やは疑問である」と云ふて居る。(Palgrave's Dictionary, edited by H. Higgs, 1923, vol. II, p. 757.) 更にエッヂウォースは、其の論述の後段に於て、ミルの「經濟學原理」第二編第六、七、八の三章は彼が歴史的研究方法を承認せることを證して餘りありと云ふて居る。(ibid. p. 759.) 斯るが故に私は、ロッシャーがミルを指して「彼の頭腦は史的に非ず」と批評したる言には全然贊成出來ぬものである。寧ろミルが進化論に味達し得なかつたと云ふ意味よりして、私はクリッフ・レスリーの如く「假令歴史的研究方法が經濟學原理の序論に於けるやうに、彼の經濟學に採用されたとしても、夫れは畢竟除外せらる可きであつた」と云ひたい。(Cliffe Leslie, Essays in Political and Moral Philosophy, 1879, p. 246.)